

ふじのくに地球環境史ミュージアムの 10 周年に思うこと

—学芸活動と研究テーマ—

柴 正博

ふじのくに地球環境史ミュージアム（以下「ふじミュー」）が開館して 10 年が経過した。この 10 年間の学芸活動を外から見てきた者として、私には、学芸部あるいは学芸課として、展示や研究を組織的かつ計画的に進める体制が十分に構築されているのか、と疑問に感じるものが少なくなかった。

私が以前勤務していた東海大学海洋学部博物館では、展示や研究（研究については、主として展示に関連するものに限られていた）を、学芸課長のもとで職員全員が組織的・計画的に進められていた。特に展示活動では、担当者をリーダーとして数名の学芸員が企画・計画を立て、実際の展示作業では、ほぼ課内の全員が協力して作業にあたっていた。課長や部長は、基本計画の策定や予算申請、展示作業の監督などを担当していたが、実際の展示作業そのものに加わることは少なかった。このように、担当者の専門性を生かしながら、学芸員全体で展示をつくり上げる体制が整っていた。

東海大学海洋学部博物館の研究テーマ

研究活動についてみると、海洋科学博物館の水族部門では、展示生物の繁殖・育成と、それに関連する生態研究、さらに博物館の目の前に広がる駿河湾に生息する海洋生物、とりわけラブカを含む深海魚の研究が、主要な研究テーマとなっていた。

水族部門には 7～8 名程度の学芸員が所属していた。学芸員は、日々の飼育管理業務の合間を縫って、それぞれの担当生物の繁殖や飼育に関する研究を行っていた。一方、展示生物の搬入や駿河湾における深海生物の採集などの作業については、水族部門の学芸員全員、あるいは他部門の学芸員も協力して実施していた。

生物の繁殖と飼育研究では、クマノミ類やハリセンボンなどを対象とした繁殖飼育技術の開発が行われ、日本動物園水族館協会から繁殖賞を受賞するなどの成果も得られた。また、多くの学芸員が自らの研究成果を学会等で発表し、繁殖飼育研究を基礎として学位を取得していた。

駿河湾の深海生物についても、調査採集を継続的に行うことによって、多数の標本が蓄積さ

れた。また、他の水族館とも連携し、ラブカの卵の保育に関する研究なども継続的に進められていた。このように、水族部門では、日常の飼育業務と研究活動が密接に結びつき、長期的に研究成果と標本が蓄積される体制が形成されていた。

一方、海洋科学博物館には水族部門とは別に博物部門があり、同部門では海洋科学博物館 2 階の展示および自然史博物館の展示を担当していた。日常的には展示の維持管理が主要な業務であったが、自然史博物館では、恐竜などの脊椎動物化石や貝化石、現生の貝類などを展示していた。そのため、恐竜を含む化石全般の研究や、駿河湾を含む周辺地域の地質と生物に関する研究も行われていた。

振り返ってみると、これらの研究テーマ、すなわち「駿河湾を中心とした海洋生物の研究」「展示生物の繁殖飼育研究」「駿河湾周辺地域の地質・化石・生物の研究」などが、海洋学部博物館における、いわば「コレクション・ポリシー」になっていたと思われる。すなわち、研究テーマと収集資料、展示活動が相互に結びつき、それが長期的に標本と研究成果が蓄積されていく仕組みを形成していた。

コレクション・ポリシーと研究テーマ

ふじミューでは、以前から「コレクション・ポリシー」が明確になっていないという議論があった。博物館は、その博物館だからこそできること、そして果たさなければならない使命を明確に掲げ、その個性を存在意義（アイデンティティ）として示す必要がある。そのためには、博物館の目的に沿った収集方針、組織や機能、専門分野と人材など、いわば「ソフト」の部分についても十分に検討する必要がある。

その中でも、博物館の「研究テーマ」と「研究計画」は、博物館の存在意義に関わる核心的な要素であると私は考えている。したがって、博物館として何を研究するのかを明確にし、そのテーマについて学芸員全員で検討し、組織として共有することが重要である。

その際には、①博物館の設置目的、②地域的な特性や社会的要請、③学芸員の専門分野、④組織

的な条件、などを考慮する必要がある（柴、2023）。

県立自然史博物館としてのふじミューの役割

私は、県立の自然史博物館は、単なる展示施設ではなく、その地域の自然環境に関する「研究情報センター」であるべきだと考えている。すなわち、県内の自然に関する資料を収集・整理・分析し、それらを基礎として県民に対する生涯学習を行う教育機関であるとともに、県行政に対して自然環境に関する情報や科学的知見を提供するシンクタンク的な役割を担う複合的な機関である（柴、2023）。

このような役割を果たすことは、博物館の主たる設置者・スポンサーである県庁に対してだけでなく、県民に対して博物館の存在意義を示すうえでも重要である。そのためには、博物館の研究テーマと研究方法について、明確な考え方を持つ必要がある。柴田ほか（1973）がすでに述べているように、自然史博物館の調査研究は、まず地域全体の自然、動植物、地学分野にわたる自然環境の特徴を把握するための定性的な調査を行い、次いで定量的な調査を進め、それらを基礎として地域の質的特性を把握するとともに、その時間的変遷を追跡していくことが重要である。

このような調査研究を長期間にわたって継続することによって、地域の自然環境に関する資料と情報が蓄積され、それが博物館独自の研究資産となる。そして、その成果が展示、教育普及、環境教育、さらには県行政への情報提供にも活用されることになる。

ふじミューの研究活動について

では、ふじミューでは、この10年間に、博物館の核となるこのような研究がどのように行われてきたのであろうか。

具体的には、ふじミューではどのような研究テーマが設定され、各研究員はそのテーマに沿って、それぞれの専門性を生かしたどのような研究を行ってきたのであろうか。また、それらの個別研究が、博物館全体としてどのような研究計画の中に位置づけられているのであろうか。

もちろん、博物館の研究員が行う個人研究は、本来、誰からか強制されるものではなく、研究員自身の自由な意思によって決定されるべきものである。しかし、博物館での研究では、可能

であれば、個人研究も博物館全体の研究テーマや設置目的に沿ったものとし、自らの専門分野における力量を高めるとともに、博物館活動全体の質の向上につながるものとするのが望ましい（千地、1978）。

そのためには、個々の研究員が自由に研究するだけでなく、博物館として具体的な研究テーマを設定し、組織的に調査研究を進め、その成果とデータを長期的に蓄積していくことが必要である。個々の研究を、博物館の中で有機的に結びつけることによって、はじめて博物館としての研究力が形成されるのではないだろうか。

ふじミューの研究テーマと学芸活動への期待

ふじミューは、「100年後の静岡」というテーマを掲げ、豊かな静岡県の自然環境を将来にわたって展望する博物館である。それならば、ふじミューは、博物館の核となる組織的な研究体制を、より明確に示し、構築し発展させていくことが重要であると考ええる。

2024年に提案されたふじミューの「コレクション・ポリシー」は、これまで述べてきたような博物館として何を明らかにするためにどんな資料を収集し、どのような研究を継続的にを行い、その成果をどのように展示・教育・社会に還元していくのかという、ふじミューとしての具体的な学芸活動の方向性を示したものであるというより、単にふじミューの収集標本の概要を示したものと、私には思える。

もし、現時点でそのような組織的な研究体制が十分に構築されていないのであれば、今からでも決して遅くはないと思う。むしろ、開館10年という節目を迎えた今だからこそ、これまでの活動を振り返り、今後を見据えた研究テーマと研究体制を構築する好機ではないだろうか。

地域の自然を対象とする研究には、短期間では成果が得られないものも多い。しかし、博物館には、大学などの研究機関とは異なり、世代を超えて資料と情報を蓄積し、長期間にわたって地域の自然を見続けることができるという大きな強みがある。その強みを生かすためにも、明確な研究テーマを設定し、個々の研究員や研究協力者の専門性を生かしながら、それらをふじミュー全体の研究計画の中に位置づけ、組織的・継続的な研究を進めることが必要である。

今後、ふじミューならではの研究テーマと研究計画が明確に示され、組織的な学芸活動が展開されることを強く期待している。